緑風舎
自由空間

第43回 緑風舎コンサート

弦楽四重奏の夕べ

関西弦楽四重奏団

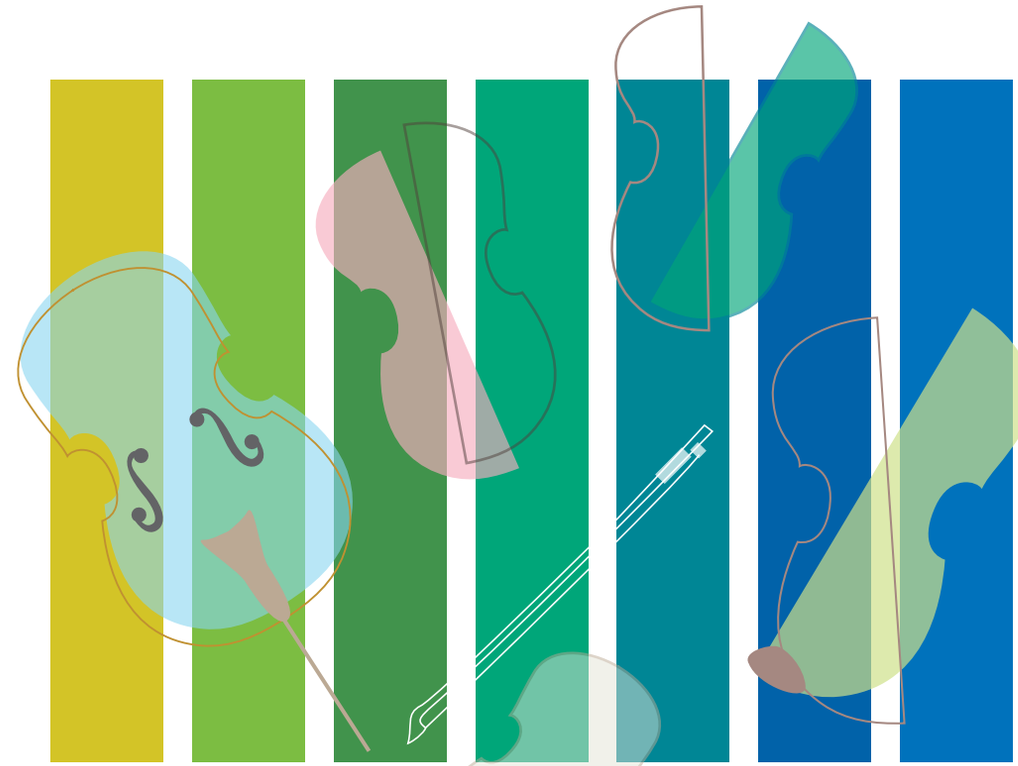
The Kansai String Quartet

Vn 林　七奈 *Nana Hayashi*

Vn 田村安祐美 *Ayumi Tamura*

Va 小峰航一 *Koichi Komine*

Vc 上森祥平 *Shohei Uwamori*



Sat. Jun. 30, 2018 6p.m.-

緑風舎音楽ホール

Today's Program

＜モーツァルト＞

アイネ・クライネ・ナハトムジーク K.525

モーツァルトのセレナードの中でとりわけ人気の高い作品である。1787年８月10日、ちょうどオペラ「ドン・ジョヴァンニ」の第２幕を作曲していた時期に完成された。同表題はモーツァルト自身が自作の目録に書き付けたもので、「小夜曲」「小セレナード」と同じ意味のドイツ語であるが、モーツァルトの死後出版された初版ではこの表題を用いずに「セレナード」としている。楽章構成も現在では交響曲的な４楽章構成をとっているが、モーツァルトの自作品目録には「アレグロ、メヌエットとトリオ、ロマンツェ、メヌエットとトリオ、フィナーレからなる」とあることからセレナードの原則通り５楽章構成をとっていたものと思われる。楽曲は簡潔な書法で書かれており、第１楽章の主題から全楽章の主要主題が導き出されているためか、全体の構成が非常に統一されたものとなっている。何よりも親しみやすい旋律によって奏でられるセレナードらしい開放的で明快な曲調がこの曲の人気を高めている。

＜ベートーヴェン＞

弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 op.95『セリオーソ』

草稿に「1810年10月、友人L・v・ベートーヴェンよりツメスカル氏に捧げられ、10月に書かれる」とあるように、ハンガリーのチェロ奏者ツメスカルに捧げられた。この言葉の前に〝Quartett serioso（セリオーソ：「厳粛な」「まじめな」)〟とベートーヴェン自身による指示があり、草稿段階では全曲につけられていたが出版の際なぜか省かれ、第３楽章にのみ ma serioso と記されている。第３楽章がこの曲の中心をなすと考えられたのかも知れないが、第１楽章冒頭から厳かな趣、気難しさをかもしだし、ベートーヴェンらしい聴き所満載の一曲である。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は交響曲等と同じく初期・中期・後期に分かれるが、この曲は中期最後の作品となる。彼はある手紙に“この曲はいわゆる通の愛好家のために書かれたもので、決して公の場で演奏することのないように”と記している。そのためか、作曲後かなりおくれて1816年９月にウィーンのシュタイナー社から出版された。初演は1815年５月ウィーンのシュパンツィヒ弦楽四重奏団によって行われた。ベートーヴェンは、この曲の後14年間、「第９交響曲」の完成後まで、弦楽四重奏を手掛けることはなかった。

―― 休　憩 ――

＜ベートーヴェン＞

弦楽四重奏曲第7番 op.59-1『ラズモフスキー第１番』

ベートーヴェンが35、6歳の時に作曲した弦楽四重奏曲第７番・第８番・第９番の通称。1806年、ロシアのウィーン大使アンドレイ＝ラズモフスキー伯爵に献呈され、それぞれ、ラズモフスキー四重奏曲第１番・第２番・第３番ともよばれる。Op.59は、先輩のハイドン、モーツァルト、そしてベートーヴェン自身の初期の弦楽四重奏曲とは一線を隔し、規模、構成、各楽器の表現などが充実した、後期の作風の嚆矢を成している。特にこの第７番は一番規模が大きいものとなっており、全楽章がソナタ形式で書かれている。第２楽章はスケルツォで、「第九交響曲」と同様の配置である。
初演当時の評判ははなはだ悪く、ツェルニーは初演の際、居並ぶ人びとがベートーヴェンが戯れにこんな曲を書いたのだろうと笑ったと伝えている。曲中にロシア民謡が現れるが、これは伯爵が頼んだという説と、ベートーヴェンが伯爵を喜ばせるために入れたという説がある。

上森祥平（チェロ）　田村安祐美・林　七奈（ヴァイオリン）　小峰航一（ヴィオラ）

歴史的楽団かと見紛うほどの堂々たる名称の団体は、現在 日本のオーケストラのコンサートマスターや首席奏者として、あるいは数々の室内楽コンサート等でも活躍する第一線のプレイヤー達が弦楽四重奏へのひときわ強い情熱と意志を持って2012年に結成した新鋭の弦楽四重奏団であり、京都のカフェ・モンタージュにおけるサロン・コンサートを軸にその活動をより発展させるべく意気込んでいる。
4人はそれぞれ東京藝術大学で学び、ヨーロッパでの研鑽と活動の後、林 七奈は現在、大阪交響楽団コンサートマスター。田村 安祐美は同じく大阪響のコンサートマスターを歴任し、現在は京都市交響楽団で活躍。小峰 航一は札幌交響楽団首席ヴィオラ奏者を経て現在は京都市交響楽団首席ヴィオラ奏者。上森 祥平は日本音楽コンクール第一位を契機にドイツでの研鑽を経て、現在ソリストとして、また主要オーケストラの客演首席奏者としても多忙な活躍を続けており、2016年には第14回 齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞している。
弦楽四重奏を演奏するということは、指揮者が存在し、大人数で演奏するオーケストラでの場合とは異なり、より自主的・自発的な作品へのアプローチが可能となり、それによって得られる体験が改めてオーケストラ活動へ有効にフィードバックすることができる。
ベートーヴェンが生涯にわたり、創作を重ねてきたことで知られる不朽の16作品が『聖典』と位置づけられているのをはじめ、ウィーン古典派から20世紀に至るまで、まさに傑作の宝庫。関西弦楽四重奏団はこれらの作品をわずか1回のコンサートで取り上げるだけでなく、アウトリーチなど、より多くの機会を創出し、演奏を重ねて深化させてゆくことを目指している。
2016年 3月にはファーストアルバム「関西弦楽四重奏団 グラズノフ＆ボロディン』をリリース。ベートーヴェン：弦楽四重奏曲全曲を手がけることについては2015年2月から2017年2月に京都：カフェ・モンタージュで完結したが、新たに、2017年11月からは「G.A.コンサルタンツ クラシック・スペシャル〜関西弦楽四重奏団 ベートーヴェン：弦楽四重奏曲全曲ツィクルス」を大阪：ザ・フェニックスホールにて開始。活動のエリアもすでに関西圏に限ることなく、東京や名古屋等からも招かれている。
常設弦楽四重奏団の結成と活動の継続は決して容易なことではないが、その中にあって、気鋭の音楽家たちによる強い情熱の発露である関西弦楽四重奏団は音楽界に新たな活力をもたらすものとして期待される。
2014年度大阪文化祭賞奨励賞、2015年度咲くやこの花賞受賞。